

お染の嘆き

野村胡堂

一

「八、あの巡礼を跟^つけてみな」

平次は顎^{あご}をしゃくつて見せました。が、浅草橋の御見附を越して、浜町の方へトボトボと辿^{たど}って行く男巡礼、頽^{たい}然^{ぜん}とした六十恰^{かつ}好^{こう}の老爺^{ろうや}に、何の不思議があらうとも、ガラッ八の八五郎には思えなかったのです。

「あの、拙^{ます}い御詠歌^{ごえいか}をやつて歩く——」

「そうだよ」

八五郎はそれ以上の問答を重ねませんでした。主人の命令を受けた獵犬のような素早さで、老巡礼の後をヒタヒタと跟けて行つたのです。

老巡礼は口の中で何やらブツブツ呟^{つぶ}やきながら、一軒一軒の戸口に立って、恐しく下手^{へた}な御詠歌を歌つて歩きましたが、何処でも相手にしてくれそうな様子はありません。

何軒目か——小意気なしもたやの前へ来ると、格子が開いて、盆の上へ小錢を捻^{ひね}ったのが一つ、四十恰好の女が差出しました。

老巡礼の御詠歌は、その報謝^{ほうしゃ}とは関係なく、しばらくは続きましたが、歌が終ると、

「——お染やあい」

さまで、高くはありませんが、身に沁みるような悲痛な声が、老巡礼の唇を衝^ついて出たのです。

^{あるじ}主人の女はしばらく躊躇^{ためら}いましたが、やがて思い切った様子で、

「お前さん、どうしたというんだい。お染さんとかを、尋ねてでもいなさるのかい」

老巡礼の踵きびすを返した後姿に声をかけたのです。

「ハイハイ、左様でございますよ、お神さん、——取って十九、左の眼が見えない、お染という娘を御存じじゃございませんか」

「お染さんというのは、一人二人知ってるけれど、左の眼が悪いのは知らないねえ」

「どなたも左様仰しやいます。——やはりこの世では縁がないのでございましょう。——そう思つて諦めあきらようとは思いますが、浅ましいことには諦め切れません」

老巡礼は声もない鳴咽おえつに、皺しわだらけな頬を引吊らせながら、ポロポロと涙をこぼしているのです。

「まア、お気の毒な」

女主人は思わず鼻を詰つまらせましたが、それ以上に立入ったところで、何うにもならないと思ひ返した様子で、トボトボと遠ざかり行く、老巡礼の後姿を見送るばかりでした。

「親分」

八五郎は路地の外にいる平次の姿を見つけると、老巡礼から目を離して、その側に寄ります。

「シッ、——もう少しあの巡礼の後を跟つけるんだ。俺は外に仕事がある」

「いやな術てじゃありませんか、親分、引くつ括くくつて二三百引ぞくつ叩たたいてやりましょうか」

ガラッ八の八五郎は、巡礼の愁嘆しゅうたんを、物貰いの念入りな術てだと思つたのでしよう。



「馬鹿なことをしちゃならねえ、——あれを見るがいい」

平次の指した方を見ると、十七八の綺麗な娘が一人、老巡礼の後を追って、何処までも見え隠れに跟着て居るのです。

「へエ、——筋がありそうですね、親分」

「手前はあの娘を知らないのか」

「この辺の者じゃありませんよ」

「この辺の者で、あれほどのきりようなら、八五郎が知らない筈はないだろう」

「まア、そう言ったようなもので——」

「いやな野郎だな——とにかく、あの親爺が宿屋につくまで、後を跟着て見るがいい。飛んだ草臥れ儲けかも知れないが」

平次はそれっ切り、老巡礼も、娘も見捨ててしまいました。八五郎に言いつけて置けば、地獄の底までも、執念深く跟着て行く

ことが解っているのです。

二

この巷の^{ちまた}一些^{さじ}事が銭形平次の勘^{かん}を裏切らずに、翌々日は思いも寄らぬ大事件になって現れました。

「親分、——来ましたぜ、あの娘が？」

「到頭」

ガラッ八の八五郎が、あわてて注進して来るのを、平次は妙に予期したような心持で待ち構えていたのです。一昨日^{おととい}老巡礼を跟^つけた娘の顔には、不思議な疑惑の色がありありと見えたばかりでなく、平次の方に記憶がなくなるとも、娘の方では平次をよく知って居る様子だったのです。

「親分が焼け出されたとは知らずに、元の家のあたりをウロウロして居るのを、いい塩梅に拾って来ましたよ」

「何処にいるんだ」

「外ですよ」

「早く伴れて来な。うっかりすると、鳥は飛ぶぞ」

「へエ——」

ガラッ八は外へ飛出しましたが、路地を二三度出たり入ったりしたと思うと、

「親分、た、大変ッ」

格子の外から脳天^{のうてん}に抜けそうな声を出します。

「何をあわてるんだ。——娘の姿が見えなくなつたろう」

「それほど知っているなら、親分」

「だから、鳥が飛ぶぞ——と言ったじゃないか。十七や十八の娘が岡っ引の家へ来るのはよくよくだ。思詰めてここまで辿りついても、いざとなると怖くなって逃出したんだろう」

平次は思いのほか泰然としておどろく様子もありません。

「落着いて居ちやいけませんよ、親分。——親の敵を討ちたい——
——って言ったようだから」

「親の敵？」

「誰も相手にしてくれないが、銭形の親分なら、きっと筋道を立てて下さるに違いない——とも言いましたぜ」

「たいそう頼られたようだが、それにしちや逃げるのは変だぜ」

「どうしたものでしょう、親分」

「相手が若くて綺麗な娘だと、意気込みまで違って来るぜ」

「そんなわけじゃねえが——」

「所、名前を訊かなかったのか」

「親分に逢ったら、申し上げます——てやがる」

八五郎は少しむくれて見せました。

「いずれまた思い直して来るだろう、二三日待って見るがいい」

「そんな暢気なことを言っているうちに、敵役は逃げてしまいますよ。何とかあの娘の家を突止める工夫はありませんか」

「たった一つある。——手前、この間の巡礼の宿を見究めて来たらうな」

「谷中の笠守様の手前、木賃宿へ入ったところまで突止めましたよ」

「よし、それが判りや手繰れるだろう。行ってみようか」

銭形平次とガラッ八は、昼下りの町を真っ直ぐに飛びました。

谷中の木賃宿で、老巡礼を捉えたのは、それから半刻ほど後。「何も怖がることはない。少しわけがあつて、お前の身の上話が訊きたいのだよ。——お染とかいう娘のことから話してみるがいい」

平次は穏かな調子で切出しました。この辺は三輪の万七の縄張り、番所へつれて行くとうるさいと思つたのでしよう。真昼の木賃宿のガラ明きなのを幸い、裏の小部屋を一つ借りて、おどおどする老巡礼に相對したのです。

「皆んな申上げます。親分さん、——私ほど因果なものはいません」

老巡礼の話は最初から涙で濡れました。その筋を掻いつまんで言う——。

老爺の名は百松、生れは川越在、今でもそこには、親類預けになつたままの家も屋敷も、田も畑もあるのですが、東国西国の霊場を廻つて七年目でようやく江戸までたどり着いたといひます。

「娘のお染が二つの時先妻に死に別れ、後添のお染という女房貰いました。これは、才覚も容貌も十人並に優れていながら、まことに心掛の悪い女で、自分の腹に生れたお七という娘可愛さに、継娘のお染を、隣土地の悪者で、贓品買を片手間にしている音次郎という者に十両の金をつけてやり、私の前や世間体を、神隠しに逢つたということにしていたのでございます」

「——」
「当座は嘆きも悲しみもしましたが、私もまだ老朽ちた年でもなく、二番目娘のお七の成長を見ているうちに、お染のことを忘

れるともなく年が経ちましたが、七年前、お七が疱瘡^{ほうそう}で死んでからは、私の心持は、また、三つの歳行方不明になったお染のことで一パイになり、その日その日の仕事にも身が入らない有様になりました」

「――」

「その頃は女房のお染も心が挫^{くじ}け、その上巫女^{いちこ}の口寄せで、お染の生霊^{たま}の祟^{たた}りで、お七が死んだと聞いては身も世もございません。渋^{しぶ}る私を無理に口説^{くど}き落して、十年前に長崎へ行ったという音次郎を尋ねながら、罪亡ぼしかたがた、西国巡礼の旅に出たのでございます。

娘お染を捜しながら、贖罪^{しよくざい}の旅は、それから七年の間続きまして。音次郎は相変らず、贓品^{ぬげに}や抜荷^{ぬけに}を扱って、大阪から長崎へ、江戸へと移った後を尋ねて、骨にも沁^しむような艱難^{がいなん}が、去年の暮、江戸へ入る一足手前の、神奈川の安宿で、お染の命を奪ってしまつたのです。

一たんの過^{あやま}ちから、継娘^{ままこ}を音次郎に始末させたお染は、それからは一日一刻も安らかな心持はございませんでした。私と二人、拙^{ます}い御詠歌を歌いながら、人様の門口に立っては、ツイお染やあい——と言つたのでございます。お染を捜し当てるまでは、地獄の底までも旅をつづける心算^{つもり}でございましたが、何分の艱難^{がいなん}に身体を痛めた上、風邪を引いたのが因^{もと}で、——お染、堪忍してくれ、済まない、済まないと言いつづけながら死んでしまいました」

老巡礼百松の話は、哀れ深く続きます。

「その娘の行方が、近頃になって判ったというのだろう」

平次は百松の話のスピードを促す^{うなが}ように、少しばかり先を潜^{くぐ}りました。

「音次郎が江戸で古道具屋をしているということが判って、飛んで参りました。谷中の八軒町で、手広くやっている川越^{かわごえ}屋、——あれが昔の音次郎でございます。七年目で捜し当てた嬉しき、いきなり飛込んで店先で怒鳴り立てると、お前の娘などを知るものか、死んだ女房が夢でも見たんだろう——と剣もほろろの挨拶、二度目には私を突飛ばして下水の中に抛^{ほう}り込み、もう一度来やがったら、言い掛りを申立てて、見廻りのお役人に引渡すという無法なことを申します」

「その音次郎のところに、娘があつた筈だが、あれは誘拐^{かどわか}されたお前の娘とは違うのかい」

平次はちよつかいを掛けて見ました。

「町内で評判者の娘でございますが、あれはまるつきり違います。私の娘のお染は取って十九になる筈ですが、音次郎の娘はまだ十七位で、それに、お染は綺麗^{もや}な娘でございましたが、可哀想に左の眼は、生れながら白い霰^{もや}がかかっておりました。音次郎の娘は両方の眼が綺麗で、名前もお崎とかいうそうで——」

「それで諦^{なまや}めたというのか——」

「諦^{なまや}めるようなそんな生優しいことではございません。十七年前に女房のお染が、十両の金をつけて始末を頼んだお染、音次郎が知らない筈はありません。死んだか、生きているか、売られた

か、人にやったか、それを白状させるまでは毎日でも参ります。今日もこれから川越屋へ行くところでございましたよ」

百松の一徹な顔には、炎のような熱心が、メラメラと燃えるようにさえ思えるのです。

「ちょうどいい塩梅だ。一緒に行ってみよう」

「親分さんも」

「そうだよ。音次郎だって、木や石じゃあるめえ。この俺からも口を添えて、娘のありかを訊いてやろう」

「有難うございます。それでは親分さん」

平次とガラッ八は、百松を先に立てて、其処からはほんの一丁場の八軒町に向いました。

が、平次もガラッ八も、あまり、神経の鋭くないらしい百松も、八軒町に入って、次第に不思議な空気を感じました。

「おや？ 変じゃないか、八」

「川越屋には忌中の札が出てますよ、親分」

「――」

百松は何にも言わずに、ゴクリと固唾を吞みます。

店は半分鎖したまま、ガラクタ物の古道具が少々、その奥の方には、それでも二三人の男女が、若い娘を囲んで、しめやかに話している様子でした。

「取込みのところを気の毒だが、主人の音次郎が居るだろうか」
平次はその中へ、横柄らしい顔もせずに入って行きました。

「あ、銭形の親分、――主人は亡くなりましたよ」

立って来たのは、町内の庵室に行い済している蓼斎居士という、
発句も詠めば、経も読むといった法体の中年男でした。

「えッ、音次郎が死んだ？」

一番驚いたのは老巡礼の百松です。

「おとつい昨日の晩、娘のお崎さんの留守中に、頸を縊くびつて死にましたよ」

蓼齋りょうさいの後ろから顔を出したのは、下谷一番と言われた万両分限ぶげんの主人、佐野屋正兵衛の分別顔でした。

「お前さんは、佐野屋さん？」

「この谷中の奥に小さい寮りょうがあるので、店の前を通る毎に、古道具を冷かしたりして、川越屋とは懇意になりましたよ」

佐野屋正兵衛は弁解ともなく、こんなことを言うのです。

その間、娘のお崎は黙って首をうな垂れて居りました。二度まで平次やガラッ八に顔を合せたのを、ここでは言って貰いたくなかったでしょう。

近所の衆らしい女達も、コソコソと帰りました。つづいて蓼齋りょうさいと正兵衛も、用事を拵えて立ち上がります。残ったのは、店で使っている十五六の小僧が一人と、あとは娘のお崎だけ。

「お崎さんとか言ったね。——お前と顔を合せるのも、これで三度目だ。混み入った話がありそうだが——」

平次はしずかに煙草入を抜きます。八五郎はその間に気をきかせて、老巡礼の百松と小僧の栄吉を外に連れ出します。

「四度目ですよ、親分さん」

「はて？」

「一月ばかり前、近所の寺方へ押込おしこみが入ったとやらで、三輪の親分さんと一緒にお出でになりました」

お崎は思いの外ハキハキして居ります。そう言われると何処か

で見たことのあるような、——美しいと言うよりは、愛くるしい、
聰明そうめいそうな顔立ちが人を牽ひきつ付けます。

「そんなこともあったね」

しばらく江戸中の神社仏閣を荒し廻って、古文書、古写経こしやきよう、古版の経文から、本尊の仏体仏具まで手当り次第に盗み歩いた不思議な怪盗の詮索せんさくに、谷中の寺町まで来たことのあるのを、平次も思い出したのです。

「ところで、いろいろ聴きたいことがあるが、父親の死んだことについて、何か腑ふに落ちないことでもあるのかい。——八五郎に、親の敵を討ちたいと言ったそうだが」

平次は静かな調子で、お崎の話を出しにかかりました。

「あんなに機嫌のいい父とうさんが、死ぬ気になる筈はありません。それに」

「——？」

「私には不思議なことばかりでした」

「最初から順序を立てて話して貰おうか」

処女おとめの感傷を整理して、平次はお崎の話に筋道をつけて行くのでした。

それに依ると、——老巡礼百松が、変な掛け合いに来るのは、お崎もかなり神経を痛めた様子で、その誘拐かどわかされた娘のお染とやらのことを、もういちど詳しく訊くわく心算つもりで、一昨日思い切って老巡礼の後を跟け、話しかける折もなく、柳橋を渡って両国まで出てしまったというのです。

気のついた時はもう夕暮、女の足では明るいうちに帰れそうもなかったので、柳橋の知合のうちを訪ねて、晩飯の世話になり、

そのこの隠居と小僧に送られて、谷中の自分の家へ帰って見ると、父親の音次郎は、店先の三十貫もあろうと思う仏像に縄をかけ、その一端を長押なげしの上から、居間に通して、その縄の端くびつこで頸くびを吊つって死んでいたのです。

お崎の驚きは言う迄ありません。大声で近所の人を呼び集め、父の死骸を長押なげしからおろしましたが、身体にまだ温か味が残っているくせに、もう息を吹き返させる術すべもなかったのでした。

騒ぎの中へ小僧の栄吉は帰って来ました。一刻ばかり前、急ぎの用事で本郷まで使つかに出されましたが、門口を出るとき、始終店へ遊びに来る蓼齋りょうさいに逢ったので、安心して出かけたと言うのです。町内の人達も駈けつけ、翌日は変死人としての検屍けんしも済ませましたが、生前人附合いの悪かった音次郎には、友達も親類もなく、わずかに下谷の万両分限佐野屋正兵衛が、親身になって世話をしてくれ、やがて、孤児みなしこになったお崎も、一七日が済んだら、店を畳んで引取ろうと言い出してくれました。

形ばかりの葬式を済ましたのは昨日きのう、何もかもこれでおしまいになって行くのを見ると、お崎は胸に畳んだ大きな疑問のやり場もなく、そつと脱け出して、評判の銭形平次に訴えようとしたのですが、御検屍まで済んだのを、荒立てて世間を騒がすでもあるまい——といった、処女おとめらしい弱氣さそに誘さそわれて、平次の家格子戸の前から、追われるように帰って来たのは、ツイ今しがたであつた——とこう言うのでした。

「父親の死んだのが、尋常でないと何うして解つたのだ」

平次は尋ねました。

「言っても構わないでしうか、親分」

「構わないとも、——俺の胸一つに畳んで置いて、滅多にお前に迷惑のかかるようにはしない心算だ」

「頸くびを縊くくるのに、長押ながしの上へ縄を通して、その先へ仏様を縛ったのは変じやありませんか。仏様は台座だいざから落ちて、床ゆかに転ころがて居ましたか——」

お崎の眼は、涙に濡れながらもピチピチした知恵に輝きます。

「縄は輪にして、頸へ引っかけてあったのだね」

「いえ、頸の後ろで強く縛ってありました」

「すると踏台ふみだいは？」

「何んにもありません」

「すると、縄にブラ下って、宙で自分の頸を縛ったことになるが——」

平次の頭脳はもう、この事件から『不合理』を嗅ぎ出したのです。

「お役人様方も、佐野屋の旦那も、お父さんは頸を縄で縛ったまま、店のお仏像を台座から突き落とし、自分の身体が重いお仏像に吊られて、足が浮いたのだと仰おしゃいました」

「成程」

「でも——」

お崎の処女おとめらしい、鋭い叡知えいちが、何処が怪しいということもなく、この仮説かせつに反対して居るのでした。

平次は立ち上がって、いろいろ調べて見ました。居間の中には、案外道具らしいものはなく、長火鉢はありますが、それは反対の隅の方で、踏台の代りにはならず、炭取や、箱膳はあったにしても、これは踏台になるほどのものではありません。

勝手から真物の踏台を持って来て、暖簾のれんをかけた店口の上の長押を調べました。頸吊りの縄の跡は、僅かに埃りの上に印されただけ、ここを重点にして、十六七貫の人間を、三十貫あまりの仏体が引摺り上げた様子もなかったのです。

店へ行つて見ると、仏像はまだ台座から転げ落ちたまま、片隅に寄せられてありますが、恐ろしく頑固な青銅製で、多分露仏ろぶつに建立したものでしょう。少しの剥落はくらくも損傷もなく、この仏像を転がし落された不釣合に高い木製の蓮台にも、不思議なことに、大した傷も見付からなかったのです。

「成程、こいつは少し変だ。こんな手数のかかる頸の吊りようをする人間もあるまいが、こんな手数のかかる人殺しも始めてだ」平次もさすがに唸うなられます。現場に駆け付けて、死骸を一目見ることが出来たら、何とか解決の鍵を掴むことも出来たでしょうが、何も彼も済んでしまった今となっては、どうすることも出来ません。音次郎の死骸は昨日のうちに、一切の手続が済んで葬ほうむってしまったのです。

四

「親分、——変なものがありますよ」

ガラッ八が店の隅から頓狂とんきやうな声を出しました。

「何だ、八。騒々しいじゃないか」

「こいつは驚くぜ、親分。外から見えるように並べたのはガラクタだが、戸棚の奥や、台の下や、風呂敷の中にはピカピカしたもののばかりだ」

「こいつは、お触れ書ふがきの廻った品ですよ、親分」

「何だと」

「俺あつしには何が何やら解らないが、経文だの、仏具だの、お仏様だの——いや、こいつは大変ッ」

あまりの騒ぎに、平次も飛んで行って見ました。ガラッ八の面白そうに動く手に従って引張り出されたのは、ことごとくお奉行所のお触れ書に載のった贓品ぞうひんばかり、この一二年の間、江戸中の寺々から盗み集めた宝物のうち、十の二つ三つは此処にあると言っても差支えはなかったでしょう。

「成程こいつは大変だ。寺方の関係だから大急ぎで寺社のお係りへも届けてくれ。それから、お山同心にも申上げるんだ」

平次はもう、お崎の感傷になど係り合っては居られませんでした。

間もなく見廻り同心が出張して、川越屋かわごえやの家中を引っくり返して調べると、盗み溜めた寺方の宝物は、仏像仏具、経文あわ併せて八十幾点。床下と天井裏に隠した金銀は、ザッと二千三百両、あまりのことに、役人方も暫くは口もきけないほどの驚きです。

寺荒しの怪盗は、武州無宿の音次郎と判り、娘のお崎も幾度も幾度も取調べを受けましたが、これは兇惡無慙きょうあくむざんな曲者の娘らしくもなく、あまりに清純なのと、父親の悪事を毛ほども知らなかったので役人方を驚かしました。

この騒ぎが江戸中に拡がると、三輪の万七は、憤々ふんぷんとして駈け付け、平次に嫌味の数々を聞かせながら、必死となって探索を始めました。

「親分、とうとう三輪のが出しや張って巡礼の親爺おやじを縛ってしまいましたよ」

ガラッ八がそう言って来たのは、その翌々日でした。

「何？ あの百松を縛ったというのかえ」

「蓼齋りょうさいがあ晩、川越屋の裏のあたりをウロウロしている老爺を見たんだそうですよ」

「そんなこともあるだろうが——少し困ったことになったよ」

「何が困るんで、親分」

「俺は外のことを考えて居たんだ。あの老爺は人などを殺せる筈はないが——三つのとき誘拐かどわかされた娘を捜さがして、七年の間巡礼すると、どんな心持になるかな」

「とにかく、娘を誘拐したのは音次郎でしょう。娘を捜して七年ものあいだ苦勞した人間だから、怨うらみもまた人一倍じゃありませんか」

「それも理窟りくつだが、——娘の行方ゆくえは、まだ判らないだろう。音次郎が死んでしまえば、その娘の行方は、この先も判る道理はない」
「成程ね」

「音次郎の口を塞ふさいだのは、あの百松じゃあるまいよ」

そんな話をしているところへ、飛脚屋ひきやくやから赤紙付の手紙を一通届けて来ました。

「手紙ですよ、親分」

「それを待っていたんだ」

平次は封を切るのももどかしそうに、ザッと手紙に眼を通します。

「親分」

後ろから覗く八五郎。

「八、——この通りだ。あの巡礼の百松は真物ほんものか偽物か、川越へ手紙をやって調べて貰ったんだ。その返事は一々あの老爺おやじの言う通り、少しの食い違いもない。頸筋たんこぶの痰瘤たんこぶのことまで書いてある。これで俺の考えが決ったよ」

平次は手紙を畳み直して立ち上がりました。

「どう決ったんで——」

「あの老爺が、川越在の百姓百松に相違ないと解れば、今度はお崎の身の上を調べて見なきゃならない。手前は、あの娘の顔を見覚えがあるとは思わないか」

「そう言えば何処かで見たことのある顔ですよ。ずっと遠い昔のようでもあり、ツイ二三日前のようでもあり、——ニツと笑靨えくぼの寄る所が」

「それじゃ、あの百松を何処かで見たことはないか——」

「そう言えば、あの小汚こぎたない老爺じじいも何処かで見ましたよ。何かの弾はずみで、二三本しか残らない歯を出して笑う顔が——」

「ね」

「あッ、違いえねえ。あの百松老爺じじいと、お崎の顔が、どこか似て居るんじゃないやありませんか、親分」

「気が付いたか、八。若い娘と六十の爺ちよつとみさんだ。一寸見じや似たところもないが、何かの拍子に、二人の面差おもさしに似たところがある。それを俺も手前てめえも、遠い遠い昔に逢った人のように考えて居たのだよ。——来い、八。面白いことを見せてやる」

平次は八五郎を引摺ひきずるように、川越屋へ飛んで行きました。裏口から入ると、寒々とした居間に、お崎はたった一人、深々

と物を考えて居ります。父親が非業に死んだ上、その父親が寺荒しの一番冒瀆ぼうとく的な大泥坊と知れては、全く世間へ顔向けをする気力もありません。

「お崎さん、ちょっと昌平橋まで一緒に行ってくれ」

平次の飛込んだ姿を、

「――」

お崎は怨めしうらそうに見やるばかりです。

その気の進まないのを、どんなに骨を折ってつれ出したことでしょうか。昌平橋の角井憲庵けんあん——その頃蘭法らんぽうで聞いた名医のところへ、半ば権柄けんがらづくでつれ込んだのは、その日の夕方でした。

「この娘の左の眼を見てやって下さい。——これは生れながらの丈夫な眼でしょうか、——それとも」

平次のせき込んだ調子を、憲庵は大医らしい沈着さで眺めながら、静かに天眼鏡てんがんきょうを取って、お崎の眼を診察しんさつし始めました。

「フーム」

しばらく何やら考え込む憲庵。

「どうでしょう先生、この娘の眼が生れつき良いか悪いかで、大変なことになるんですが」

「生れつきの良い眼ではないな」

「しめたッ」

平次はすっかり興奮して、日頃にもないせっかちな顔を突出します。

「これは手を入れた眼だよ、銭形の、——決して生れつきの良い眼ではない。が、待ってくれ、これほどの療治りょうじをする名医は、江戸は愚おろか、京にも大阪にもない筈だが――」

「長崎ですよ、先生ッ。十六七年前、長崎で療治したのですよ」
「十六七年前長崎で？——成程それで合点が行った、蘭法の療治を受けたのだらう。それならばよく解る。子供の時は、多分白い靄もやのかかった眼であつた筈だ」

「その通りですよ、先生。」

「一体、それがどうしたというのだ」

角井憲庵も何が無やら解りません。

「それが解れば、この娘の仕合せです。大泥坊の娘でないということ、角井憲庵先生が保証してくれたようなものですから」

「——」

二人の応対に現れる事件の進展の奇つ怪さに、当のお崎は唯眼ただを瞠みはるばかりです。

「お崎さん、お前は小さい時長崎に居た覚えはないか」

「——」

お崎は悲しく頭こうべを振りました。よしんば長崎に居たことがあるにしても、それはお崎が三歳の時でなければなりません。

「眼の療治をした覚えがあるだらう」

「え、それなら夢のように覚えて居ります。毎日お医者へ通うのが厭で、さんざん泣いたことを——」

「よしよし、それ丈だけで沢山だ」

「すると親分？」

お崎の眼は疑惑と不安に動きます。

「驚いてはいけないよ、お前は川越屋音次郎の娘ではない。今から十七年前、音次郎に誘拐かどわかされて長崎へ行った、あの百松の娘のお染だよ」

「――」
お崎の唇の色がサツと変ったのです。

「音次郎は長崎で拔荷ぬけにを扱う序ついでに、お前の眼の治療をしてやったが、あんまり可愛かったので、本当の娘にして育てる気になったのだろう。それにはお染ではいけない。長崎で生れ変ったから、お崎と名を変え、大阪、京都、江戸へと流れて来たのだろう」

「――」
大泥坊の娘でないとは解ったお崎のお染は、その次は、人殺しの娘としての自分を見出したのです。

五

お崎とお染には、二つ位年齢としの隔りがあるように思いますが、誘拐かどわかした日を誕生と勘定し、子供心に教え込んで育てさえすれば、二つや三つの年齢はどうにでもなるでしょう。

お染のような綺麗な娘は、十九と言っても、十七と言っても、世間ではそのまま受け容れてくれるに何の不思議もありません。

話の辻褄つじつまはそれで合いました。お崎も自分がお染だったことに、何の疑いも挟はさみませんが、そう信ずる一方には、恐ろしい苛責かしやくの咎しもとが、犇々ひしひしとお染の心をさいなむのです。

親の敵と思い込んでいるうちは、百松が縛られたのを、快い心持で見て居りましたが、その百松が自分の本当の親と判ると、自分が口添くちぞえして縛らせたような気がして、もう一刻もジツとしては居られなかったのです。

「親分さん」

八軒町の川越屋を見捨てて、柳原の知合という家に落着いたお崎のお染は、近間^{ちかま}に居るのを幸い、毎日平次を訪ねて、百松にかかる疑いを解くようにと頼み込むのでした。

一方死んだ後の父親、音次郎と懇意^{こんい}だった万両分限の佐野屋正兵衛は、いろいろ説きすすめて、自分のところへ引取って世話しようと言ひ出しますが、お染は平次夫婦の人柄^{ひとがら}に打ち込んで、万両分限の養い娘になろうという気もなく、ひたすら平次の家に日参して、百松の許される日ばかり待つて居ります。

平次はその間にも活動が続けました。あらゆる証拠が百松を下手人^{しめ}として示しているにもかかわらず、百松の純情だけを頼りに、群がる疑いを解いてやろうと思ひ定めたのです。

蓼齋^{りょうさい}の庵室を平次が訪ねたのは、それから四五日後でした。

「ね、宗匠^{そうしょう}、——こんなわけで、百松が可哀想でならねえ。百松が三輪の万七に縛られたのは、お前さんの口一つだったんだから、もし、百松が無実なら、飛んだ罪をつくるわけで、もう一度、あの晩のことを考えちゃ下さるまいか」

平次の折入った顔を、蓼齋もつくづく見やります。

「なるほど、親分にそう言われると、私も寝醒^{ねざめ}がよくねえ。私の力で出来ることなら、どんなことでもしてやりたいが——」

剃^そり丸めた頭の手前、蓼齋もひどく困^{こま}じ果てた様子でした。

「宗匠があの家へ出入りするようになったのは、どんな関係^{かかりあい}で？」

「なにね、ちょいちょい面白い道具があるから、店を覗いて見たのが始まりで」

「川越屋をまともな商人と思ったのですかい」

「いや、最初は気が付かなかったが、近頃は由緒ゆいしよのある寺々の宝物を持って居るから、まさか泥坊とは思わないまでも、贓品けいずか買いをしているものだと思が付いて、それから遠退くようにして居ましたよ」

「――」

「一二度は意見もして見たが、人の言うことなどを聞く男じゃなかった。――私もツイ腹が立つて、そんなことをするのは仏敵ぶつてきだから、どんな罰ばちが当るかも知れない。今のうちに気を付けるがよい――位のことは言つてやりましたよ」

「どうしてあつし達の耳に入れて下さらなかったんです」

「そう言われると一言もない。仏様のために、音次郎を打ち殺す氣になったかも知れないが、訴人そにんする氣は、毛頭なかった」

蓼齋りようさいはそう言つて、よく光る額を叩くのです。

「所で、あんな殺しようをするのは、どんな人間でしょう。大抵の人間なら、怨うらみがあつても、殺ただけで済みそんなものだが、わざわざ縄で吊上げて、仏様を下手人げしゅにんにするのはどう言うわけでしょう」

平次はそれが聞きたかつたのでしよう。

「私にも解らないが、――いずれは仏様を仏様と思わない人間のことだろう。朝夕念仏の一つも称となえるものに、あんな罰当りなことが出来るわけではない」

蓼齋はそう言つて、思い出したように数珠じゆずを爪繰つまぐるのでした。

「仏様を仏様と思わない人間？」

平次はまた深々と考え込みます。

その翌る日、平次は下谷の作野屋正兵衛を訪ねて見る氣になり

ました。一つは、お染が執念^{しゅうねん}深く佐野屋の勧誘^{かんゆう}を受けて、断り切れそうもなくなっているので、平次はその代理に、はつきりお染の意志を伝えて、七年越し自分を捜してくれた父の百松と一緒に、川越の在所に帰るより外に望みのないことを言う心算^{つもり}だったのです。

大名の下屋敷ほどある佐野屋の豪勢な屋敷を訪ねた平次は、五六人の盛装を凝^{こら}した女中に、次々と案内されて、思いも寄らぬ奥の一間に通されました。

正面に燦爛^{さんらん}として輝くのは、二間ほどの大仏壇で、その前に端座して、何やらブツブツやって居るのは、主人の正兵衛でした。やや暫く待つて居ると、勤行^{ごんぎょう}を終った正兵衛は、水晶の念珠^{ねんじゆ}を袂に納めて、静かに此方へ向き直りました。

「銭形の親分、飛んだお待たせしました」

「いえ、どう致しまして、あつしこそ飛んだ邪魔で——」

「朝夕二度のお経を上げないと、どうも私は気が済まないのな。

——ところで、御用は？ 親分」

まだ四十そこそこでしょう。蒼白くて品の良い正兵衛は、女中共に何やら言い付けながら、思い出したように、こう言うのでした。

「何でもありません。——あの晩、川越屋へ旦那がいらしたの、ありや何刻^{なんどき}でした」

「えッ」

平次の言葉は自信に満ちております。相手は諸大名の御金用達、苗字^{みょうじ}帯刀も許されている佐野正兵衛ですから、岡っ引の平次は対等の口をきけるわけもなかったのですが、相手の調子に少しの躊躇^{ちゆう}

踏^{ちよ}がある、職業的な平次の攻撃がヒタヒタとその弱点に付け入るのです。

「旦那、隠しちゃいけません。あの死骸を吊った縄の結び目は、羽織や足袋^{たび}の紐より外に、物を結んだことのない人間の仕業だし、床に転がった仏像の下に、何があつたと思います」

「――」
正兵衛はサツと蒼くなると、しきりに自分の腰のあたりを捜^{さが}し始めました。

「佐野屋さん、外には子分が二三十人、手ぐすね引いてあつしの合図を待っていますよ。踏^{ふみこ}込んで家捜しすれば、川越屋の音次郎が、諸方の寺々から盗み出した、宝物の三つや四つは、この屋敷から出る筈。免^{のが}れっこはありませんよ、旦那」

「――」
「川越屋を殺したのは、わけのあることでしょう。それを聞こうじゃありませんか」

「――」
「仏像を下手人にした手際は、並大抵の人間に出来ることじゃない。仏像を仏像とも思わない人間というと、手近なところお前さんより外にはないはずだ。お釈迦^{しゃか}も観音様^{かんのんさま}も、お前さんが見れば、何百両、何千両の金と見える。ね、そうじゃありませんか。大仏壇の前へ客を通して、出鱈目^{でたらめ}の経^{きょう}を読むのを見て、私はすっかり謎が解けたような気がしますよ」

平次は一気にまくし立てました。

「恐れ入った、親分、私が悪かった。――いかにも、音次郎を仏像に吊ったのはこの私に相違ない。が、音次郎を殺したのは私じゃ

ない」

「――」

佐野屋は畳の上に両手を突きながら最後の抗弁をつづけます。

「あの晩、音次郎に呼出されて行つた。――今まで三四度、盗んだ物と知りながら、品に惚れてツイ買い取つたのを、音次郎の強請の種にされ、恐ろしく高いものを、次から次と買わされたのだ。

――今度はあの三十貫余りの仏像、明日にも五百両で引取つてくれという難題だ。あんまり馬鹿馬鹿しいから断ると、目安箱へ一本抛り込んで、佐野屋の家捜しをさせる。贓品が五つでも六つでも出て来たら、この私は御処刑、家は闕所に決つて居る。その時は川越屋も無事では済むまいと言うと、川越屋などは身上も氣も軽いから、訴え出る日は江戸をずらかる日だ――とこう言うのだ」

「――」

「仕方がないから言いなり放題になる心算で、あの晩も出向いて行くと、驚いたことに当の音次郎は長火鉢の前で縊り殺されてゐるのだ。一時は驚いて逃げ帰ろうと思つたが、日頃の怨がムラムラと湧いて、何としても癪にさわつてたまらない。あの仏像を明日は此処へ運ばせる心算で、店に用意してあつた縄を外し、床の上の仏像から居間の長押の上を通して、死骸を吊り上げてやつたに違いない。――あとで、あんな無法なことをしなきゃよかったと思つたが、その時は、あんまり腹が立って、仏像でも背負つて、地獄へでも行きやがれと思つてしたことだ。親分、これは嘘も駈引もない話だ。どうぞ、穩便にして下さい。この通り、――佐野屋の身代を、半分差上げてもいい、お願いだ」

正兵衛は本当に、畳に面形を押さぬばかりにかき口説くのです。

「そんな氣障きざなことを言うと、穩便えんべんにするどころか、思い切り荒立てたくなるよ。本当に悪かったと思ったら、信心でもない仏様いじりなんか止して、少しは貧乏人めづにでも恵んでやんなさい。――ところで、そうすると本当の下手人は誰ということになるだろう」

平次もここまで来ると、ハタと行詰りました。佐野屋正兵衛は贅沢こうが嵩じた性格の破産者には違いありませんが、言うことは嘘らしくありません。

「親分、万一の場合、私が疑われては叶かなわないから、音次郎の頸に巻いた古手拭を、あの店にある大きな瓶かめの中へ抛ほうり込んで来ましたよ。それが何かの証拠になりやしませんか」

「――」

平次の頭の中には新しい光明がパツと射しました。

六

川越屋に取って返して、店の瓶かめの中を見ると、佐野屋が言った通り、煮にべたような手拭が一筋、少しばかり血のにじんだのが出て来ました。

その足で笠森稲荷側かさもりいなりの安宿に取って返すと、

「親分さん、巡礼の爺じいさんが、帰って来ましたよ。飛んだお骨折で」

主人あるじがそんなことを言って迎えるのです。顎あごを一つしゃくって通して貰うと、狭い汚い部屋の隅っこに、一塊かいの檻ぼろ褌をつくねたように、百松は縮ちぢこまって居るのでした。

「有難うございました、親分さん、お蔭様で許されて参りました。
——銭形の親分さんのお口添えがありましたそうで、その上娘の
行方まで判って、こんな嬉しいことはございません」

百松はそう言いつづけながら、フト挙げた眼が、銭形平次の
持つて居る古手拭ふるてぬぐいに止まったのです。

「爺さん、この手拭を知って居るだろうな」

「——」
百松の渋紙色の顔はサツと血の氣がうせます。

「皆んな申上げた方がいいよ」

「ハイ、申します、皆んな申上げます。——その代り、娘がもうこ
こへ来る筈になって居ります。せめて十七年目で親子名乗おやこのすむ
まで、縛ることだけは勘弁して下さい」

「——」
「あの晩、私は音次郎の家へ行きました。あのお崎という娘が、
私の娘のお染に違いないと、私は心の中できめて居たのでござい
ます」

「——」
「年が違っても、眼が二つとも黒々としていても、自分の娘を何
時までも知らずにおる筈はございません。両国から帰るとすぐ、
川越屋へ行つて、娘を返せと強談ごうだんすると、——あの音次郎の奴が、
いかにも、お崎はお前の娘のお染に相違ないが、いつかはお前に
覚さとられるだろうと思つて、遠方へ、二度とここへ帰られない遠方
へやつてしまった——とこう言うじゃございませんか」

「——」
平次は黙つてその先を促うながしました。

「あさつての方を向いて、煙草を輪に吹く姿の憎々しさ。ツイ、かつとなつて、後ろから頸筋へ手拭を巻いてしまいました。――

あとは無我夢中、氣の付いた時は、ここへ歸つて来て瘡おこりのように顫ふるえて居りました」

「――」

「親分さん、私はたしかに音次郎を殺しました。すぐにも名乗つて出る心算つもりでしたが、親分と一緒に川越屋へ行つて、お染の無事な顔を見た時、すっかり考えが變つてしまいました。せめて、十七年目で、父娘おやこの名乗合いをするまで、隠せるものなら隠しおおせようと、こう思い定めたのでございます」

「――」

老巡礼の百松は、平次の裾すそに縋すがりついて、無い齒を噛みしめながらむせび泣くのです。

「今晚、柳原から娘が来る筈になっております。たった一晚、名残を惜しませて下さい。親分さん。――あれ、そう言ううちにも、誰か、門口へ来た様子――」

神経の極度に立っている百松は、門口の跣足あしおとを聴き付けて、もうフラフラと立ち上がるのでした。

廊下を踏ふむ女の跣足。

「父さん」

破れた唐紙からかみは外から開いて、パツと飛込んで来たのは匂うばかりのお染、一塊の花束のように、ヨロヨロと立ち上がった百松の諸腕もろうでの中へその身体を投げかけたのです。

「お染」

「父さん」

激情の情景^{シーン}を背後に、銭形平次はそつと部屋の外に滑り出ました。

「親分」

お染を送って来たガラッ八の長ンがい顔が、其処にあったのです。

「八、帰ろう」

「下手人の当りは？ 親分」

「縛られた仏様に訊くがいい。俺はもう岡っ引は厭^{いや}だ。明日は八丁堀へ行って、十手捕縄を返上するよ」

「又いつものが始まったぜ」

平次の後を追って、ガラッ八も外へ飛出しました。襟もとがゾクゾクする二月の谷中道^{やなかみち}、涙に濡れた平次の頬を、梅の匂いが、ほのかに吹いて過ぎます。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第四卷 河出書房 昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>